

作文を書こう 6 「つすれば書ける」 「書き出し」 (保護者と児童・生徒へ)

ニュージャージ―補習授業校(2012年9月1日)

直木賞や芥川賞を授賞した作家でも、「どうしても書けない」という悩み・スランプがあると聞きました。本物の作家でも、書く苦しみを味わっています。ものを書くと言うことは「創作」「創造」ですから大変な作業であることは間違いありません。

けれども、「作文の書き出し方」を知っていると、書きやすくなります。国語作文研究所の宮川俊彦先生から学びました。そのコツをお知らせします。(私は、実践を通して宮川先生のコツは有効だと実感しています。)

真似をしても大丈夫です。一度、そのコツを使って書いてみると、次からは自分の言葉で書けるようになります。そして、**印象的な作文**になります。

そのコツとは、「お・せ・つ・か・い」です。

①「お」↓音から書き出す。(擬態語や擬音語で始める)

【例】 バシツ。

ボールが、ぼくのかたに当たった。

②「せ」↓せりふから書き出す。

【例】 「じらーろうかを走るな。」

いきなり先生からどなられて、ぼくは心ぞうが止まりそうになりました。

③「つ」↓つなぎの言葉(だから、そして、もしも)から書き出す。

【例】 もしも、色のない世界があったとしたら。

それでも私たちの目に、満開の桜はきれいに見えるのだろうか。

見えるような気がする。

④「か」↓会話から書き出す。(財団の文芸作品コンクールでも多くの方が書いてくれました。)

【例】 「やったあ。」

運動会で赤が勝ったので、ぼくはうれしくなりました。

⑤「い」↓意見から書き出す。

【例】 タバコをすう、すわないは本人の自由だと思う。

ぼくの住む町では、歩きながらタバコをすつてはいけないという決まりがある。

歩きながらタバコをすうことは、体によくないことだから、こういう決まりができたの

だろうが、ぼくは反対だ。

これらは、明治以降、我が国の作文教育で培われてきた、技(「わざ」書く技術)です。

この技(「わざ」書く技術)は、私たち大人(教師や保護者)が子どもに教える必要があります。子どもたちだけで、見つけ出すことは至難の業です。ここに、「指導」の値打ちがあるのです。

特に、補習授業校においては、年間四十三日の授業日しかありません。前号にも記しましたが、技を教えて、書かせて、褒めて、自信を持たせてやるのが教育です。

「自由に書きなさい」という言葉は子どもを苦しめるだけです。「書き方」の一助になれば幸いです。